### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

### 陳龍正の思想: 東林学の一継承形態

荒木, 見悟 九州大学文学部: 教授

https://doi.org/10.15017/18032

出版情報:中国哲学論集. 1, pp.1-16, 1975-10-01. 九州大学中国哲学研究会

バージョン: 権利関係:

## 陳 龍 思 想

の 継 承

芸詩文に熱中し、二十六、七の頃は経済に志したという。しかし三十歳の時、父を亡い、ついで母に死別し、 まれた。かなり広汎な土地を所有する名家であったようであるが、于王に至り、 いわゆる官僚地主としての地歩を固めることとなる。 (一五八五一一六四五)は、 仙仏にあこがれて、長生を求めたり僧侶になろうとしたために、ひどく父を落胆させ、十四歳の頃は、 をめぐる人びと 万曆十三年六月、 龍正の記した「困学説」(全書巻二十一)によれば、 于王 (字伯襄 号穎亭) 荒 始めて進士に及第し(万暦十四年)、 の第二子として、 木 見 嘉善の胥 悟 境遇が苦 彼は十一、

二歳の頃、

陳龍正

龍 Œ

書巻十)に見ることができる。その中に、次のような一節がある。 陶菴は、 明代古文家の領袖と言われる帰震川の児であって、 その略伝は、 高忠憲の「陶菴先生伝」 (高子遺

しくなるとともに、漸く本格的な学問に志すに至るのである。この頃から龍正が師事し始めるのは、

(諱礬龍)・帰陶菴(諱季思)の三人であって、この中思想家として特に著名なのは、

の三人は相互に親交があった。

黙然として自ら怡ぶを以て、その事とする所を知らざるなり。」 う。帰子は既に三たび公車に対すれども第せず、又両たび婦を喪い、羸疾を得、 人相得て歓すること甚だし。時に高子は室を蠡湖の上に築き、水居という。呉子は室を祥蕩の上 (陶菴は)乙未(万暦二十三年)、京邸に従い、 たがいに過従し湖山を几席とし、風月を衣被とし、図史を飲食とす。見る者、三人の一室に相対し、 嘉善の呉子志遠に交わり、錫山に過り、 室を崑の西邨に築き、陶菴という。 高子攀龍に交わる。三 に築き、荻秋とい

「高忠憲年譜」によれば、高子が呉・帰二子とこうした清雅静穏な交際をあたためた時期は、

万曆二十六年

(時に

高忠憲であるが、こ

忠憲は三十七歳)より二十八年にかけてのことであるが、(2) 人知己との 如しし 保に至 右の水居居住中に作られるのであるが、 と断定してはいるものの、型通りの朱子学にはまり込んでいたわけではなく、 切瑳 て闡 を重 明すること殆んど尽せり。 ね 黙 坐澄心の 体験を積まねば 孔子を学ぶには、必ず程朱によること、 後年、 ならなかった。 先に万暦二十年 (高子遺書巻三、 「崇正学闢異説疏」 正に室に入るには、 困学記参照) 次のような一節が 大悟を得るまでには、 において、「孔子の道 有名な 必ず戸に ある。 「復七 なお よる

は

ししという。 世の群豪を開くというべし。 (禅宗は)終日終年。 先生 (忠憲) 無理の話に参ず。真にこれ労して功なきなり。故に程子は、 はその意を反してこれを用い、 龍正がこの記に加えた後跋 人をして且く静中において聖賢の の中に、 『天下に禅客より忙しきは 切要の言 を体

<u>\_\_</u>

n 主客両界にわたる諸 れていたことは、 は 注意するにとどめる。この三人に共通する黙坐澄心の工夫の内容が、果して厳密な意味で同一のも とに至って 鼓し書を読み、 り上げることとし、 は単 ここに忠憲の主静尊重に対する、 かでないが、そこに時流を透視しつつ、 なる朱子学の追 は 晏坐黙識して、 又塵埃中の一氷壺秋月なり」(全書巻四十五、与金正希侍御) ほぼ間違いあるまい。それは具体的現実からの逃避というよりも、 今は、 間 題を冷静に凝視し、 認としての静 先にあげた帰陶菴もまた、 天地の垠なきを窮め、 龍正 坐ではなく、 の共感が示されているわけであるが、 そこに本心の満足し得る定点を確立しようとしたものであろう。 既成の思想類型にこだわらず、自己定立をはかろうとする意図がこめら 朱子学の修正改変をもいとわぬ静坐であっ 品物の自あるを察する」生活を送り、 茅屋に琴一張・書数百巻をたくわえて、 この と評されるタイプ 両者の関係につ 一応そこに一定の距離をお 龍正 たはずであ 他に長物なく、 から の人で ので いては、 「陶菴の人と文 あっ る あ った 次章で 3 従ってそ たことを 一琴を 'n 否か 取

と欲するに過ぎざるの 地となすあらしめんと欲するにはあらざるなり。 蓋し静坐を以て主となさんと欲せば、 'n 静 坐 の説 み は 高子の困学記中に言う所の如く、 程朱と雖もこれあるも、 則ち凡そ先儒(朱子) 、学者をして、 (三魚堂文集巻二、 必ず澄神黙坐し、 の致知窮理存心養性 動 静こもごも 学術 養 弁中 面 1 目を呈露して、 頃刻 の法 b これ 離 るる かゝ 然るの ため ے ٤ 15 K 変易 ち以て下手 6 %せざる そ清初の朱子学者陸

稼書は、

高忠憲を攻めて、次のように言う。

あるのである。 群の人びとに触発の契機を見出したことの意味が、了解されて来るのである。(4)。るのである。この点から顧る時、龍正が少年時代より二十余年にわたる迂余曲折を経て、 漸く主静をか かげ

死したことは、 次に 龍正は、 高忠憲の自殺及び周宗建の入獄(宗建は龍正の仲弟の外舅にあたる)とともに、朋党というものの利弊 魏大中と同学であるが、 彼が東林党の一人として、魏忠賢に逆らい、天啓五年七月、ついに獄 中 · で 憤

について、 龍正はまた外舅丁氏の因縁で、 深刻な反省をもたらす端緒となった。 その一族丁賓(名札原)より経史の手ほどきを受けたと言われる。丁賓は、(5) 王龍溪

の門をくぐり、現に『王龍溪集』発刻者の中に名を列ねているのであるが、彼がどれだけ左派王学の思想に浸ってい たかは疑わしい。『王龍溪集』(巻十五)には、「冊付丁賓収受後語」なる一文を収めるが、そこには、

を聞くに及び、志ますます自ら励み、学を為むる所以の方を求む」 資性敦茂にして、少年にして利を発す。 即ち古道に志あるも、 あえて俗套を以て自ら埋没せず。 良知 の

俗套にはあきたらなかったものの、過激な良知受容者ではなかったことを思わせる。

とあり、

良知説や陽明の学徳を知る機会を得たであろうことは疑うべくもない。 龍正の知己の中で、特に著名な人物として、劉念台がいたことを指摘しておこう。 魏大中が獄死し た時、

学問的交流があったが、そうしたルートから、龍正と念台との交渉が生じたのであろう。龍正の眼に、念台の人物像 念台は西向再 どのように映じていたであろうか。 拝して哭し、 祭文をささげてその死をいたんだ。 (劉子全書巻二十三所収)もともと念台は、 忠憲と

念台翁は、 なる掌院な 師(忠憲) 魏忠節の題主たり。江を渉りて遠く来る。細 の広大精微なるには及ばずと雖も、清勁中、 」(全書巻四十三、復曹峨雪編修) かにその人を察するに、 またすこぶる円転の機・含容の度 真品真学、 心を世道人心 一あり。 断々乎とし ĸ

ŋ

念台思想の核心に時局収攬の能力ありと認めるものであろうか。 ここに念台の学を忠憲に及ばずとするのは、龍正なりの評価であるが、「円転の機・含容の度あり」というの L かし忠憲思想の忠実な祖述者である龍正と、 忠憲 は

ただ龍正がこの人を

の手が 得ない。 思想よりも動 かりをつかむことができる。 両 者 一の論争を示す詳細な資料は 的傾向を強め、 つい に独 自の誠意説 残っていないようであるが、崇禎九年、 にまで到達した念台とでは、 当然あるへだたりが生まれて来ざるを 龍正が念台に送った返書から、

ず。もし無事なる時、 能事なり。 この中、 功夫なお疏 なお沾帯ありとす。 一一捜剔浄尽し、 なり。 最も是なり。 理欲雙び行なう。 赤蕩々地ならしめば、妄想何によって萌蘗せん。これまさに老先生今日 然れども沾帯とは何事ぞ。 ただ勉めて策励し、 至教 陽明先生の に負くなからんことを期するのみ。」 いわゆる色利 名根 出

(全書巻四十三、復念台先生)

にささげ尽していたのであ をやや異にする両者 ように、ここでは心の深層部にまつわりつく複雑微妙なかげりの処理が問題となっていたようであり、 対する不満をもらしたものであろう。 に依らない」慎独の真義に徹しないものとする(劉子全書巻五、二十六丁)念台の眼に映じた高忠憲流の主静 未発の気象を看る」の説と、 つまりこの書簡によれば、念台は龍正の立場に、なお沾帯があると指摘しているわけであるが、 の間に、 2 った。 龍正の崇禎十三年(と言えば両者が他界する五年(6) 見解の不一致点が残されたのはやむを得ないにしても、 陽明の「良知は即ち未発の中」の説とを、ともに未だ、「中和を離れずと**雖** 龍正の崇禎十三年(と言えば両者が他界する五年前のことであるが) 龍正が、右書簡の末尾に、 禅家の理障事障説まで引合いに出して釈明している 龍正は終生かわらぬ敬意 それ すでに は の 宋儒 書簡にも を念台 人間 ú 主 義 中 の 和

「当世の碩果、 (全書巻四十六) 劉念台先生あり。 与陳 臥子紹與司 理 今 祖台の宇下に属す。 ただ賢のみ賢を知るなれば、 必ず能く徳業相 成ぜんり

無悪説 ような激励 この両者には、 へのあくなき反撃という点において、 明 宋動乱 期 に おいて、 朱子学的名教意識による民族の護持と、 重 要な共通性が見られる。 だから同 年、 陽明学左派乃至 念台の龍正 は禅仏 あ て 書簡 教 K の 説 < 次の

学問 君心を格すや否や。 の 進歩いかん。想うに下手の人は、の辞がのべられているのである。 中 は士大夫の気習を転ずるや否や。 時時これ工夫なれば、 下は生民を塗炭より拯らや否や。 もとより時時進歩の際あらん。 今日の種種 この時

能

でく上

自ら信

勉めて幸に自愛せよ。」(劉子全書巻十九、復陳幾亭) (を探りて出し、時に之を措かんのみ。世に読書人少く、 僅かに老兄輩一二を留むるのみにて、 多くは得られず。

# 一、 龍正と忠憲

に方向づけたものは、この会遇に外ならなかった。龍正は、宋代以来の学問の大勢を、 たのは、 章にのべたように、龍正は三十代にすでに高忠憲に面晤する機会をもったのであるが、 四十歳以降だというから(困学説参照)、忠憲の歿前二・三年の間に過ぎない。しかし龍正の思想を決 次のように大観する。 より本格的に教えを乞う

くその真を失い、且つ変じて象山・慈湖となる。ここに於て朱子、重きを践履に帰して、以てその弊を挽かざるを ここでは、 くその中を執りて、而も生生の旨は、 得ず。道は一なるのみ。 に帰せしは、 北宋の士大夫、 明代に於て、 躬行を軽んぜしにはあらざるなり。躬行は、言うを待たざるものあり。南宋におよび、程門の説 節義篤行、 陽明と忠憲とが別格に扱われていることに、注目せしめられよう。忠憲の陽明に対す 教は則ち時に随う。本朝の良知の教は、また訓詁沈淪の後に興る。近世、 相砥礪する者多きも、 原本を見るもの罕なり。故に二程、微妙を指示し、重きを著察

その序例に委しいが、次の一文もこれを吐露して余す所がない。(8)に一歩進めた業績として、龍正が陽明学顕彰のために編集したのが、『陽明要書』八巻である。この書編集の意図 たのである。 挈してよりこのかた、 判の核心は、その著「陽明説弁」(高子遺書巻三)にほぼ尽されていようが、しかし時あってか、「姚江は天挺 たし、事実、陽明のその体認を取り込めばこそ、東林学派は朱子学に新生面を開き、広汎な影響力をもつことができ 良知を妙悟し、 従って右に引用した龍正の文も、 掃蕩廓清の功大なり」(同上、巻九、 泥文の蔽を一破す。その功甚だ偉なり」(同上、巻九、崇文会語序)「陽明先生、 忠憲のそうした考えをそのまま踏襲したものと言ってよい。この方向 廬山書院商語序)と、 陽明の功績を讃えざるを得 良知を提 の 

者の心眼劃開し、 陽明要書すでに成る。 聖賢と豪傑と、分ちて二色の人となし、問学と康済と認めて二項の事となし、 伏して祈る、 政を為すの優、 一たびこれを披簡せんことを。 ひそかに惟 性命を談ずると作用 うに孔孟以

とき人なし。もし人人かくのごとき書を見るを得ば、或いは感発して興起するものありて、 と康済を合して一事となすものは、陽明のなす所、これなり。講学と載事とを合して一書となすもの を述ぶると、視て二種の書となす。近代、一人の身を以て、豪傑にして聖賢なるものは、 これを以て亟んで鋟みてこれを行なうは、 その世を救うこと誠に切なるがためなり。 陽明先生、 賊平ぐべく、民安んず ح 世に ij n ts かくのご 陽明の書 90

べきなり』(全書巻四十二、与朱勉斉)

熟翫すべし」(全書巻五十四、六丁)と讃えているのである。それでは、それだけ陽明の人品学術を高く評価 る向きもあるが、 に抜本塞源論については、 の大きい人傑への憧憬がある。世には陽明の思想と事功を分離し、 聖賢と豪傑とを兼備した人物の出現を待望する龍正の心中 龍正は、 「尤もこれ宗を統べ源に匯むる処にして、実に千年以来、末だ開けざるの眼、宜しく潜心 陽明思想に全面的には同調できないとしても、 ĸ は もとより明末の危局を見事に処理すべ 事功は取るべきも、 そこに人心覚醒の威力あることを認め、 思想は全くの異端邪説 しなが とす 1

る **。** 5 無善無悪論は、 が淵源 こい陽明学のかたちが示されていると思われる。 『陽明要書』凡例にみえる次の一節は、朱子学に対して陽明学を弁護したものであるが、 なぜそこに不満 はもとより陽明その人にあり、 陽明門下左派の旗印となり、 の意をもつのか。 それは、 朱子学の体質を保有する龍正としては、 既成の道徳律打破に狂奔するものの合言葉となってい 良知説に付随する無善無悪論の弊害を目撃してい とうてい受けつけら 同時に龍 る れな たのであるが、 からである。 正 かったのであ にとって望

良 知説 このように龍正は、 らべけんや。 て世事を荷うことなく、 独り陽明の教を宗とすれば、遂に正学にあらずというべけんや。 今ここに人あ 左傾 には、 ŋ きび 人倫 陽明学の端正なかたちには共感を示すのであるが、東林学の全般的傾向がそうであるように、 L 虚衷以て君子小人に鑑みることなし。 においては篤くし、 い警戒の 世に用い ない。 らるるにおいては克く済すあり、 独り陽明を排して程朱の説を崇べば、 今ここに人あり。多欲以て五倫を薄んじ、 人 を知 る にお 遂に正士とい て は 実心以 爽 つわず。

陽明先生は、 化 **禀異なり学透る。然も力めて朱子を駁す。** 眼 をゆ るめ 朱子は躬行心得、 世を持し教を垂る。 なんぞ駁すべけん

或いは亀山の語に傍り、 然りの だ嘗てあらざるなり。 より まま滞 儒を混じて以て仏に入れ、陰かに仏に借りて以て儒を攻めて、 乃ち王龍谿畿のごときあり、 あるも、 はすでに念菴羅氏ら諸儒に斥けられ その学を講ずるや、 末だ思孟に及ばずとい 情を恣にして敲剝し、一呵一罵するに至っては、ただ汝登最も甚だし。 宰予の 羅近溪汝芳のごときあり、 うは、 短喪の如きも、 則 しが、而も汝芳は楊起元 ち可 なり なお曲げて廻護を加う**。** また豈 百方晦翁を駁撃し、或いは程門の言に本づき、 周海門汝登のごときあり。 に真に道に背いて馳するもの (復所)これを奉ずること神のごとく 大低人倫を軽んじて私慾 みな陽明を尊び、 また陽明以来、

を賛け、 ほぼここに著す。」(全書巻五十四、諸儒語録) 罪を聖門に得ること極めて多し。 余、これを存して以て後学を禍するに忍びず。故に尽くこれを削りて、

横議が、毒根を散布し、国本を誤るものときめつけられるのは、当然のことである。しかも龍正より眺める時、思想の限界と特色があったと見られよう。すでに近溪・海門にしてこれほど異端視されるとするなら、李卓吾の をはかったものであることは、すでに別の箇所で論証しておいたが、それを右の如くと必ずしも人倫をやぶり私意を恣にする所にはなく、むしろ人間の自然的情念に訴えて、 顔をして、 いう李卓吾ば られた。勿論、 した虚誕無実な思想が流行する背景には、 末における左派王学のかもし出す儒仏混融の風潮にも、 機変を弄し、 りの無軌 その実社会への烈々たる関心は多とすべきであろう。 道な議論に盲従する輩が続出し、 変幻をたくましくし世態人情を根抵からゆり動かそうとする不逞な野望の跋扈が 国本を誤るものときめつけられるのは、 好んで作用を談ずる風潮、 無恥傲慢がまか さまざまな類型が しかし、 すなわち社会動向を先取りし ぞれを右の如くとらえざるを得ない ŋ 通る世相からは、 あり、 「馮道は大忠臣、 羅近溪や 人倫形態 社会秩序回復 周 卓文君は 海門 の て 新 **ر**ا ĩ の る 李卓吾の い ね の 大慧婦」 あると受取 所 よみ ታ ため O が ょ うな こう え ŋ

「人苟くも専ら作」 昼に人を殺す。」(全書巻十六、十七丁) 甪 を重んずるの意を存すれば、 その流弊、 至らざる所なく、 その鄙や、 香夜に行乞し、 その あること 狼や、

何ら生まれて来ないであろう。

(外書巻一、好言作用条参照)

まちが うした<br />
悪質無責任な<br />
作用論には、 最初か ら人倫 を無視してかかり、 懸空の悟りをふりまわす禅の影響が

大抵、 大都覇に近くして王 禅学の浅きも のは用なきも、 に近からず。 曲 これを用うれ げて顓蒙を誘い、 ば 適に以て天下を毒す。 驩虞を近づけ、 機鋒犀利にして、 深きものは用あり。 捷取に近し。」 然れどもその用 外

以上のように見て来る時、 巻二、禅家作用 (近覇) 龍 正は、 一面に於て豪傑の出現を待望しつつ、 他 面では覇儒覇禅を排撃するという、

然たるのみにあらず。 して龍正 に時代の 退の立場にあることが了解されよう。 匹塞を意識しつつ、 は 彼なりの視点から、 須らく作用あるべし」(全書巻五、二丁)の語あるは、 ある枠組の中を必死にもがきつつ進もうとする彼の苦闘を読みとるべきであろう。 陽明と忠憲の立場の相異を、 あれだけ露骨に作用主義に反対した龍正 次のように整理するのであ 一寸意外であるかも分ら だが 「節に る 中 るは、 ない ただ一室に黙 か

世 K は忠憲の「心如太虚、 本無生死」 の語をたてに取って、 陽明の 「本無始終、 寧有死生期」と同 視 とも

禅病をまぬ いう点で、 は先ず善悪を分別することを本旨とするが故に、 わずかに禅との相異を打出そうとするに対し、 か 'n ぬとするものがあるが、 陽明学が、 禅に堕する恐れがないどころか、 善悪をなみし、 忠憲は、 性善を宗とし、 照妄を混じながら、 禅の病疾をいやすことができるも 格物読書の研 人倫を尊び世界を保持 究を重 元し、 けると 経 K

て をめぐる血 は忠憲に回帰せざるを得なかったのである。 ただ龍正 が 忠憲に慊らぬ重要な一点があった。 それは朋党についての考え方である。 K ij 前章で見たよう セ ク シ ナ IJ Ŕ ズ ム の

のである。

(全書巻九、

二十一丁)こうして龍正

は

どんなに陽明学に親近感を抱くことが

あっ

たにせよ、

究局

ĸ

争に終り、 忠憲思想 して風 結合による党類と、 の なれ 団 の 力 ば の忠実な祖述者を以て任ずる龍正ではあるが、やはりこの問 民生その あらざるはなし」 *ts* なまぐさい ģ 偏党の党はあるべ ŋ Ŕ ě 偏見私慾にもとづく集団との質的相違を意識してはいる。 政争は、 過信するに至る懸念は の O 康済より遊離する恐れなしとしな (同上巻八下、 たとえその政治的意図 からず。 与筠塘) これ乱亡の本な ないであろうか。 という孤高を誇りとする正義感は、 が純正であったとしても、 れば 6 中 国 なり」 成程、 の 題に関する限り、 社 忠憲は、 一会にお (高子遺書巻七、 しかし「大抵、 į, 結果的! 「党類の党はなき能わ て 朋 慎重論を唱えざるを得 党 論学掲) の禍 依 然として自 害をめ 衰世熱腸 ٤ らぐる論 1己を中 Œ の す 義 ح 議 の な は 心 同 n 志 地

公ならざるかのみ。なんぞそれ東(林)と東 な。心の忠なるか忠ならざるか、 "或るひと東林を問う。その号は正し。 器の洪いなるか洪いならざるか、才の通ずるか通ぜざるか、言と行との公なるか (されどそれに) 入ると入らざるとを以て、賢と不賢となすは、 (林) ならざるにあらん。」 (全書巻三、十五丁、 固 なる <u>ን</u>ነ

するに似たり。」(外書巻一、梁溪朋党説)し。復七規・山居課程は、初学に開示するとと、 「梁溪先生(忠憲) の学を論ずるは、至って精なり。まさに程朱の語録と同じく看るべし。その詩文もまた妙境多 均しく大功あり。 ただ朋党説の一篇のみは、 なお激するありて発

であらう、「自負するのがそれである。」、大う、「自負するのがそれである。」、大う、「種の生々の哲学であって、「種の生々の哲学であって、 東林党の悲惨な結末と、社会不安の増大は、龍正をして、さらに忠憲の立場を乗り越えて進ませることとなった。 然らばその生々の哲学とは、 「而も生生の旨は、某また自ら体貼して之を得たり」 どのような内容をもち、 どのような実践の企画をもつもの (前引)と

## 龍正の ) 思想

字の条)と断ずるように、朱子学系の理学をふまえているのである。彼は羅整庵が、朱子学を手直しして気に重点を ることである。上来述べて来たように、 いたことは知っていたが、それに同調追随しようとはしなかった。 然るに朱子の体認の精なるを以てして、終身理気を指して二となせるは、 「気を認めて理となせは滞る。気を理より分てば支なり。ただ気に就いて理を認むとするは、羅整庵の説確かなり。 一末の思想家の座位を見定めるための、一つのきめ手は、彼がそれを理におくか、気におくか、 理には舛錯なし。 感応の際の如 龍正は、「(理学の)二字は便ち千万世の宗主となす」(外書巻 合するものは理 なり。 龍正の理気に対する考え方はこうである。 その或いは合せざるものは、 豈に草々ならんや。おもうに、 心にお くか 気には舛錯

気なり。蓋し理の専らなるを尊びて、その失を気に帰するなり。

」(全書、巻六、三十丁)

にあらざるな

ð,

任は、 ゆえに理会せず、 こうして理優先の伝統を守りぬこうとするが故に、 ことごとく主体の私意欲望に帰せられることとなるのである。従って、朱子学や東林学において、 体貼せざるなり」(同上、巻八、十八丁)と、 「道理は平平常常、 理の存在がらくらくと認定され、 現現成成たり。 ただ嗜慾意見 それに目ざめ に隔断 仏教に ぬ責 6

理障説など、 執を免れざる所以は、 あり得べ またただ理を見ること尽さざるがためなり」(同上、巻八、十九丁)と言うのである。 からざる妄論だと退けられたように、 龍正も、「理はもとより障なし。これを執ずれば、 障

という。 ところで「家伝」によれば、 高忠憲にも 類似の経験が 龍正は、 あり、 崇禎三年の元旦(四十六歳)雞鳴を聞き、 (困学記参照) これは朱子学者から、 禅的とか陽明学的と非られ 胸中曠然として一事なきを悟 る の 2 た

物に始まり、

然るのち心・理・知・行、

知・行、合して一となる」(外書巻一、不格物之病の条)と断定される。((1)朱子学的格物論が、そのまま導入され、学は虚霊より直入すべきではなく、「必ず格

合して一となる」(外書巻一、不格物之病の条)と断定され

だ

ら実践工夫についても、

の龍正の書簡にはいう。 一層明確化して来る。 ける朱王折衷の一形態を認めることができるわけであるが、 龍正よりすれば、 それでは彼が生生の哲学を説くに至った直接の動機はどこにあるのか。 朱子も陽明と同じく大悟をもったと反論されるのである。(全書巻四、 龍 正においては晩年の生生の哲学におい 崇禎十四年 (五十七歳) 七丁)ここに龍正 て、 その意味が に

既に人の死亡を救うの心なければ、 下は民志を固むるもの、 餓屍道に満つ。 所在寥寥たり。・・・・・ また他の徳行と他の経済 この時すらなお側 とを問うことなし。」(全書巻四十七、 隠を動かさず。 い **ታ**ነ に況 んや 復蔡雲怡憲長) 他 をやっ

米毎升八分にして、

而も巨室能く栗を発して饑

を賑

わ

上

は

歳

使を中州に奉ぜしが、

数年来、 ならん 巻四十七、 民の饑斃するもの幾百万。 ただ顔 答楊抉曦戸垣 わくは、 挙世の 精 兵の饑に因りて亡逃潰散するもの幾十万。 神議論、 銀子二字を丢開 せば、 則ち財 を生ずるの道理 皆食なきに因 お のず 豊に カゝ 5 見えん。

Ø こうした民生塗炭に苦しむ世相を目前にして、 重論から万物ー 体が説かれることとなる。 「天地之大徳日生」という易経の語は、 そこにはもとより、 陽明の抜本塞源論とか、 彼の重 高忠憲 用する所 とな 「人身の内

そ

外は 聞 天 15 ŋ 象は、 呼 彼 吸 を急速に迫切な生命尊重論者へと駆りたてずにはおかなかったので 天と相 灌輸す」(高子遺書巻一、十丁) という思想 の影響があっ あろう。 たであろうが、 正 の 見

する日

Þ

の

すること分明を欠き、 而も物交わり気動けば、 一天地 千修万修、帰着する処なし。近古以来、 の大徳を生という。 認むること堅定を欠けばのみ」 未だ勝を好むの心を起して、 学 はただこれ天地に生生息むなきの心 高き者は聚講して道を明らかにし、 (外書巻一、先明大主意) 物を損うの事をなすを免れず。 を完うせんことを学ぶのみ。 浅き者は自ら好んで名を立て ただこれこの主意をば、 然らず んば、 Ŧ

こうとする身勝手な意識への反撥として生まれたものであろう。 にのべた彼の覚醒は、 こうした迫切な事態を目睹しつつ、なお小我に閉じこもり、 人間としてのみずみずしい感応力 家の安穏の上 んを失っ た鈍 にあぐら 麻 也

学に、 朱子社倉法に模した同善会を同 ほとんど餓殍なく、 「これを行なうこと八九載 深い絶望を抱く所から、 道殣なし。又時時講解勧誘し、 彼の新し 毎載四たび挙し、 志とともに結成し、 い理の哲学が生まれたのである。こうした自覚のもとに彼は、 貴賤上下、 以て良心を提醒して、邪孽を消弭し、 油油として心を同じうす。 蓋しこの会を設 黙して郷約保甲の助 崇禎初 けてよ 年よ ŋ そなな 以

し。」(全書巻四十五、 b n る ほどの成果をあげることができたので 致喬聖任按台) ある。 もっとも同善会は、 すでに高忠憲が万暦四十二年、 同 名

もの 惻 軸とし、 ならったものであって、 担の情を以て救い、 をその郷里に設立して、「鰥寡孤独の中の節孝あるものに贈らして、尤もこれ 郷村社会の淳風美俗を保存し、 持てるものの応分の寄捨によって、 『高子遺書』巻十二には、 特に「一県中の老者・貧者・病者・死してよるべなき者」をは、 忠憲の 「同善会講語」三条をの 社会的緊張の緩和に役立てようとしたものであ せるが、 に加恵した」(高子年譜) それは明太祖の六論 家族 龍 先 同 Ī. を 例 ĸ

尽さざるを得ず、 の実あり。ただに恵を受くる者の感激するのみならず。 十分の妙 郷紳袍衿も、 処 あり またいよいよその惻隠を提醒す。 費少くして、 功多し。 言を聞く者も感動する 以て養いて教を兼ぬ。 上上下下、 合県善を学び、 もしこれ地方の官長も、 書院講学の名なくして、 兵火大患の到来するあ 八と善 よい ょ を ts

善会講

語

Ø

後に書して、

次のようにのべている。

此 の方の人は、 或いは落劫を免るべし。」(全書巻二十四、二十三丁)

どれだけの効果をもち得たであろうか。 外になければこそ、同善会のねらいは適切無比だと龍正は考えていたようであるが、浮き足だった時 活路だと叫んでいたのである。 安生理、 崇禎十七年、 尽く忠愛を懐き、太平の時には、便ち太平の時の随常の善悪あり、患難の時には、 数十人より発足したようであるが、約十年後には三四百人にふくれ上っている。(全書巻二十四、のであるが、事実龍正は、この会の発展に心血を注いだもののごとく、当初(崇禎五年)の会員は、 まさにまた何をか憂うべき」(全書巻二十四、十五丁)というほどの期待を、同善会の運営にかけてい に発生し、 毋作非為」という六論の言を奉じ、直ちに発心着手して善端の拡充につとめるのが、本来生生の理 難民饑民山野に溢れる危局においても、 李自成の京師入城のため、毅宗帝が自殺するという「天翻り地覆る」時期に立至っても、龍 同善会こそ書院の講学にまさる勧善宥和・官民連帯の機能をもつと強調していることに注目させら (同上、二十二丁) 国家の統一体制が崩潰し、 「貧富貴賤合して一心となれば、大戸は銭財を重んぜず、 郷村秩序の維持が自衛的手段に頼る以 又患難の時 の推広の善事 十五丁) 忠憲の場合と同 人の全動向に、 正 たのであった。 は 流冠各地 ts あ に合する 小民 お

自己の思想を一度突き放し、 台から「沾滯あり」と指摘されたのも、 静できると考えていたわけであるが、時潮は遙かに複雑な規模と力をもって急速に流動しつつあったのである。 一学の枠を越えて、 歴史を達観する眼を欠如する龍正は、 時局との対応関保を考慮しつつ、根本から再検討する試みは、 このあたりに理由があったのかも分らない。 いわばエゴの克服 ・抑止によって、 龍正 世 のとうてい 相 O 険悪を漸次鎮 思

ぬ所であった。彼はいう。

書巻二、十一丁) る所を行なう。愚者はそのやむべきに於て、みなこれを紛更す。その動くに及んでは、 一翹然として奇を見さんと欲するなり。智者はやむを得ずして、 者は安静を務め、愚者は更張を喜ぶ。その智を矜らず、故に敢て軽がるしく前人を変えず。その愚を知らず、 而るのち動く。 その動くに及んで 功なくして害衆し。」(全

だがこの愚者の道を歩む勇気をもつことこそ、 緊要な課題ではなかったろうか。

# 仏 教 観

四

ば 論者に られるように、 ということになるであろうが、 曰く、 末 かりたてた第一の理由として考えられるのは、 理なきなり。 け は る仏教 概し 集中的多角的にその論旨を展開していることに、一応注目すべきであろう。 て、 の復興 この そのいわゆる理は、 傾向 は 龍正 に批判 士 人層をもその渦中にまき込み、 O 的 排仏論をつきつめ であ 吾がい 2 た。 それ わゆる理に 儒仏一致論のすばらしい流行に対する儒者としての危機感で れば、こうした所に帰着するにしても、『幾亭外書』巻二に見 は 忠憲の言葉を借りれ はあらざるなり」(高子遺書、 さまざまな儒仏一 ば 致論者が出現する 「それ禅の 彼をここまで熱烈 巻九、 敝 瞿 に至 言 元立先生集序) K るので n な排 を 蔽

に愚なるのみ。」 我が中華の人士の周孔を習びて釈迦を心とし、 (胡) 敬斉、 往往仏 (外書 を斥けて愚となすも、 巻二、仏家神通妙用) 仏は天竺に在りては、 高き者は無主の霊心 乃ち大智慧の人にして、 を挾み、卑き者は無用の 愚に 奇跡 ĸ はあらざるな 驚くは、 則 ち誠

智、反って僧に如かざるなり。」

士大夫の

孔孟を卑んで六経を薄んずるを見るも、

未だ僧家の仏祖を非り菩薩を笑うを見ず。

これ

士大夫

(外書巻二、士不如僧)

ろう。

指摘 到るところ遊方掛搭し、 K 仏教教団が、無為徒 求 こういう逆立ちした思想界の実状に、 しているし、 香火甚 ていることを概嘆してい また江南地方における流賊まがいの現象として、 た盛ん 食の輩の逃避所となっているという、 而 ts るも寺僧殺生酗酒せざるなく、 も山川の形勢にくわしく、 る。 (全書巻三十二、与沈君儒少参)こうなれば、 龍正は歯ぎしりするのである。 各地方の虚実を識り、大戸の名姓を憶え、 社会風教上の視点によるものである。 寺の外 は屠家甚だ多き」(全書巻二十九、 衣食にあぶれた数十万の行脚僧な 龍正 が仏教 をきび 叢林いよい しく 彼 指弾する第二の は 遊民徒党同然 十八 よ盛ん るも 例を杭州 のが Î な 横行し、 ことを 天竺寺 理 の n ば 由

透 した Ŀ の かということへの洞察が欠如していることである。 t うな 龍 正 Ó 仏 教批判 を通観し て すぐに気づくことは、 忠憲が、「吾が儒は窮理を最も先となす。 *t*s ぜこれ ほ どまでに仏 教が 流 行 Ļ 理 社 숲 Ò の 各層

民

よい

よ貧し」

(外書

巻二、叢林害民)と言わざるを得ない。

これ がなされているとは見なしがたい。ましてそこに流行しているものが、 は儒を護らんとして、 かも分らないということを反省するには、 つまり彼が 或いは仏教の枠を脱した心の原点を指向する普遍的体験であるのか、と問いつめてみる視点は、 聖学中一点の微機のみ」(全書巻二十、八丁)と言わざるを得ない、 も禅に入らず」(高子遺書巻六、 「聖学中一点の微機のみ」と過少評価したものが、 かえって人間を取りそこなったのではあるまい 戌午吟其八) とうたい、 彼は余りにも根強く朱子学的理意識のとりことなっていた。 龍 実は時流を動 正自身も、 依然として禅と呼ばれ 办。 儒と禅との だから彼の次の言葉が、 「聖は以 かす最も根源的 毫忽の て禅を該 相 る特定宗教に 異 につ なも ぬる のにか 全く欠落 いて、 に足るも、 どれ その だけ 止 <sub>መ</sub> ŧ L た る て は

これほど仏教ぎらいの龍正が、雲棲袾宏の「戒殺文」にだけは共感を示し、 聞 もしそれ聖修と禅覚とは、 を執 |夕可具足せり。」(全書巻四十六、答朱勉斉) りて 以て此に当つるも、 発源はるかに殊なり、 また得ず。 径ちに人倫の日用に於て、 用功はるかに絶す。彼によりて以て此に通ぜんと欲するも、既に得ず。即 実に察し実に行わば、 「深く儒理を助く」(全書巻二十二、 忠孝到頭の処にして、

共鳴を得たか疑わしいのである。

応酬は、 じく主静を標榜するとは言え、 だにしていないことを読みとれ を失す。 し、「全べて放下するにあらざれば、 二十一丁)と言っているのは、 と初心を、 恐らく十分に理解しがたいものであったであろう。 果して禅 に意は広しと雖も、 正 確 なること疑い に見通す視点が 両者 彼の生々の哲学と協和するからであろうが、 道は多く窮するのみ」 るのである。 なし」(全書巻五十四、 終に湊泊し難し」の語を酬いたが 欠如 の 間 してい ĸ は明らかに異質のもの かつて、 たのであり、 明代思想史の先駆者といわ (外書巻二、遠庖厨の条)という所に、その基本的態 皇明儒: さればこそ龍正は、 それが結局 統凡 が 例 あったのである。 (白沙集巻三、 彼の思想と実践を、 と判定してはば 而も仏教の慈悲を評し 白沙を目して、 れる陳白沙は、 与羅一 龍正には、 から なか 峰) 定の規 龍正 明 「細 2 ---代心学思潮 た て 朱子学篤 たのである。 同かくその旨を考 格の にとって、 自 中に踏みと 信者 度 然 が の こ の に対

どまらせる結果になったのである。

釈

- 1 自 一序の冠 龍正 の生 せられ 涯に関する叙述は、 た陳幾亭全書及び幾亭外書を使用したが、 主として陳幾亭全書巻六十三、陳祠部公家伝による。 以下全書· 外書と略称することとする。 なお本稿では 四
- 2 ただし高忠憲と呉志遠とは、すでに万暦二十二年頃から交際があった。 忠憲の「困学記」
- 4 3 姚江粎毀録」参照。 忠憲 これについては幾亭外書巻二、 にお ける静坐が、 決して社会的活動を阻むものでなかったことについては、 五十一丁、 無事可為之害の条参照。 ここで龍正は、 単なる無事閑暇は大不 彭南昀も釈明 Ĺ T
- 5 丁賓の伝は、 明史巻二百二十一に出づ。

括とのべている。

- 6 幾亭全書巻五十、 致劉念台先生参照。
- 7 龍正 金書巻四十一与朱荆陽工部及び巻四十二復朱蔚園 の「高子遺書 序 参照

8

9 らい、 陽明要書 朱子学者陸稼書が、 者である彭 摘みてこれを弁ずべし。後世をして再び惑わざらしむるに庶からん」(三魚堂文集 』の編集態度に、朱学による王学制御の実質ありと読みとったからであろう。これに対し、 南昀 か 「愚思うに、 「陳幾亭先生に陽明要書あり。 王氏 (陽明)と高弟との、 分類やや妥にして、 語言流伝するものは、宜しく陽明要書の 推崇特に至れ 言巻七)とい 9 組繩 5 O の

参 照

るも、 意をもらすのは、 なお 多事なるを覚ゆ」(南畇文稿巻十一、与王草堂書)と、基本的には賛意を表しながら、 同一 事態を逆に受けとめ、 王学閉塞への危惧を示すものであろう。 多少不満

ŧ Ī

ii 李卓吾批判については、 全書巻十九、

10

拙著『明代思想研究』参照

衷論

12 して仁に親しむ。 Ē は またこうもいう。 党する者は同を喜んで異を悪む。 「群して党せずとは、孔聖の明訓なり。(論語庶全書巻十九、十六丁及び外書巻九、二十丁参照。 孔聖の明訓 心に公私あれば、 述また弁じ易し。たとえ百人を以て率と 衛霊公篇の語) 群 する者

となすも、 親しむ所の者仁なれば、 一二に過ぎざるのみ。 党は豈にかくの如く少なからんや。」 (全書巻五十

群党解)

からであろう。 められた十月十二日附書簡をさすものと思われ、この中の君子小人論が朋党の争を誘発する恐れありと考えた また朱子の与留丞相書は至当でないとのべているが、 (全書巻四十一、復銭宗伯) これは朱子文集巻二十八に収

13 黄宗義もまた「師門 (忠憲) の旨また一転せり」という。(明儒学案、東林学案四、

その心の安と不安とは、 またこうも言う。 「理義に明らかなるものは、その心の安と不安と拠るべし。 拠るに足らず。或いは浮にして専ら世情を顧み、或いは僻にして物情を顧みず。浮な 理義に明らかならざるもの 陳 龍 IE の条)

ば を貽すを惜まず。これ本心を認めて物情の外に在りとするなり。世情には、宜しく顧みるべきあり、 人に順うを喜び、人に払るを戚う。これ世情を認めて本心となすなり。僻なれば、径ちに己意を行い、 宜しく 害

また言う、 何によって本心をして自得せしめん。」(外書巻一、窮理方能見本心の条) 「正に一相も立たざる処において、万物一体の端倪を体認し出さんと欲するのみ。若し人我

15

みるべからざるあり。

格物にあらずんば、

何によりてその宜しきと宜しからざるとを分たん。

16 すれば、その高きを養い静を習うこと、 同善会運営の細かい 規定は、全書巻二十三の同善会規約に見え、 反って隠隠として一段の殺機を養成す。」(外書巻一、以生字明宗の 会講の内容については、巻二十四の同善会講

にくわしい。

17 祀議) 龍正はまた、 欧陽修・ 陸象山・陳白沙の三名は、文廟に従祀すべからずとしている。 (全書巻五十一、

文廟従

附記し 本稿 は三島海雲記念財団より受けた奨励金にもとづく研究成果の一 部である。

物格にあらずん